

# データマチュリティ推進指標 説明書

2026-05-25

独立行政法人情報処理推進機構

「基盤は整えたが成果が見えない」を越える鍵は、  
**組織的なデータ利活用能力＝データマチュリティ**です。

本資料は、それを支えるマネジメント・ガバナンスとの三位一体の構造を基に、データマチュリティ推進指標の全体像を解説します。

## ■ 組織的データ利活用の三位一体の要点とは？

データから価値を引き出すには、3要素の合わせ技が必要

- **データマネジメント**

戦略を定め、基盤を設計・構築・運用します

- **データガバナンス**

リスクを管理し、信頼性を確保し、統制を保ちます

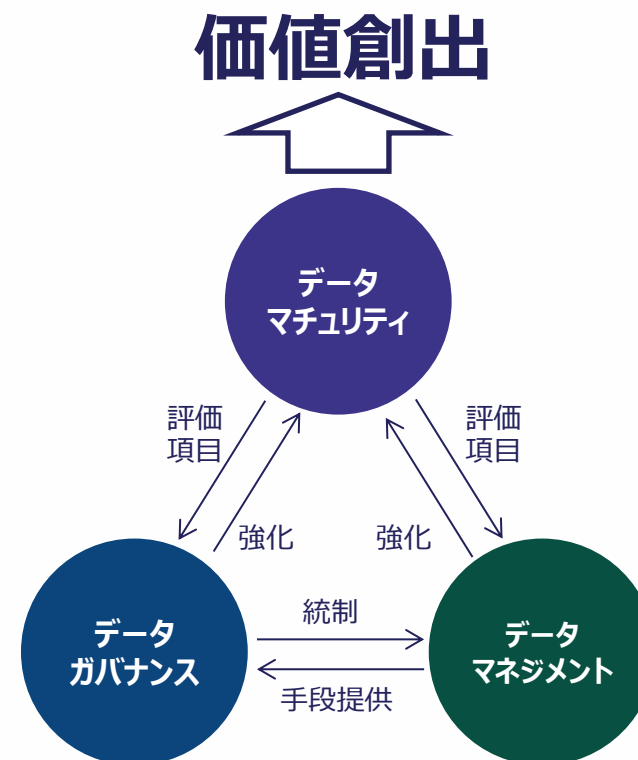
- **データマチュリティ**

組織がデータを業務・意思決定に活かしている状態を把握し、継続的に改善します

マネジメントとガバナンスをどれだけ整えても、使いこなせなければ価値にはなりません。  
一方、マチュリティを高めるには、人材・ツール・ルールの整備が欠かせません。

上記3要素は**目的と手段の関係であると同時に、相互補完の関係**にあります。  
本資料はこの構造を前提に、推進指標の中身を説明します。

## ■ 三位一体の相互補完関係



## ■ 本資料の目的

データマチュリティ推進指標の内容を、わかりやすく整理・解説します。

## ■ 本資料の概要

データマチュリティとは、組織がデータを継続的に活用し、業務や意思決定にどのくらい活用できているかを把握するとともに、その状況を段階的に改善していくための考え方です。

具体的には、以下の点を明らかにすることを目的としています。

- データが業務や意思決定に適切に活用されているか
- データの価値を高めつつ、リスクを適切に抑制する取組が行われているか
- これらの取組の結果として、組織の力が向上しているか

これらの状況を可視化し、継続的に改善していくことで、組織全体の能力および価値の向上を図るものです。

また、この能力はデータ駆動経営の実現において極めて重要であり、海外においては、継続的な評価と改善のサイクルを通じて組織力を高める取組が進められています。

データマチュリティ推進指標は、こうした実践を支えるために、現状把握、課題の共有、改善行動までを一連の流れとして推進するための仕組みです。

# 本資料の想定読者

次の方を读者として想定しております。

- データ活用に関心のある方
- 本指標の概要を知りたい方
- 組織でデータ活用を担当する方

はじめに

要旨

本資料の想定読者

目次

## 1. データマチュリティ推進指標のコンセプト

- データマチュリティとは
- データマチュリティを高める利点
- データマチュリティが低いことによるリスク
- データマチュリティ向上の難しさ
- データマチュリティ推進指標とは
- データマチュリティ推進指標の目的と策定方針
- データマチュリティ推進指標の位置づけ
- データマチュリティ推進指標の活用方法

## 2. データマチュリティ推進指標の「設計」コンセプト

- データマチュリティ指標回答シートの構成要素
- 成熟度
- カテゴリ
- 設問

付録

- 用語集
- 設問の策定過程

# 1. データマチュリティ推進指標のコンセプト

# データマチュリティとは

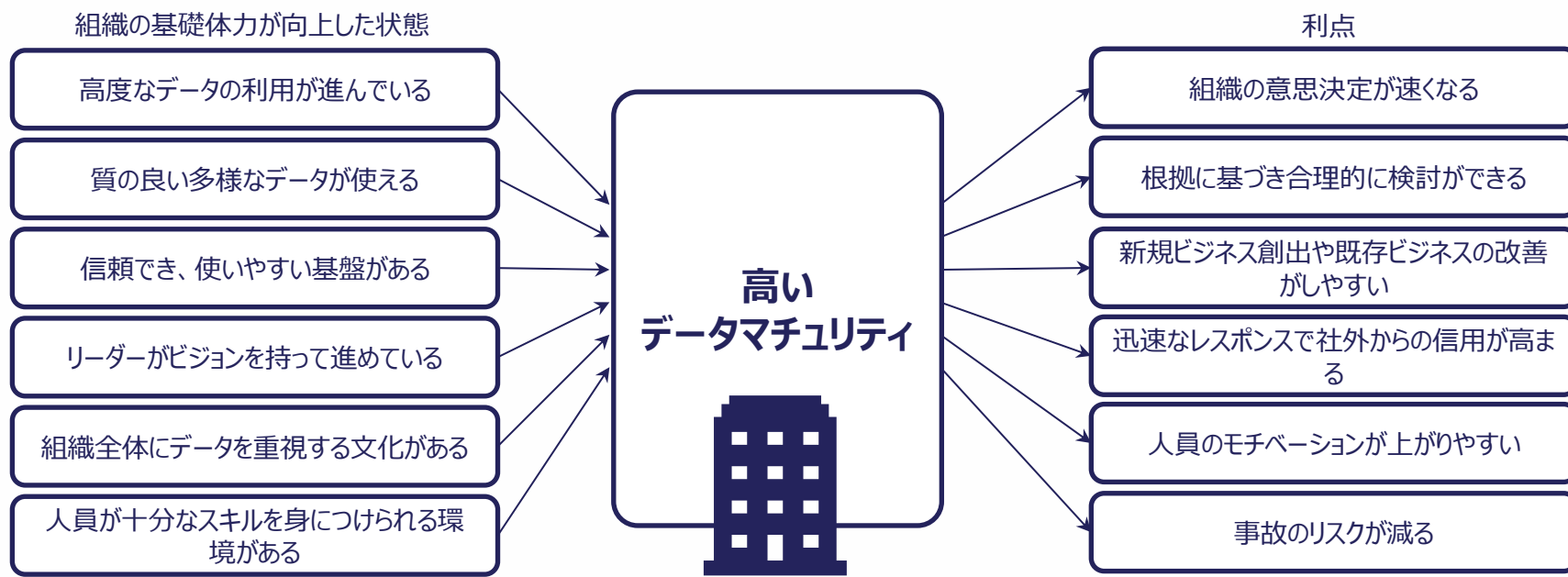
## 「データマチュリティ」＝「組織的なデータ利活用能力」

- ◆ データマチュリティとは、データを使いこなし、データの価値の最大化とリスクの最小化を継続的に実現できているか、組織が最大のパフォーマンスを発揮できているかを明確化し、改善していくための考え方です。
- ◆ **データ駆動経営の実現のためには必須**の能力です。
- ◆ データマチュリティに関する取り組みは海外では積極的に導入されており、継続的・定期的にアセスメントを行いながら、組織運営を改善することで、段階的に、各部門の自主的な組織力向上を促しています。

# データマチュリティを高める利点

- データマチュリティ（組織的なデータ利活用能力）を向上させることで、データ利活用に対する**組織の基礎体力**が強化されるとともに、サービス向上などの具体的なメリットが期待されます。

## データマチュリティの向上がもたらす利点 \*1



## 最終的なDX推進に寄与する利点 \*2



DXのうち  
データ戦略の  
側面を強化

**競争優位性**  
データ駆動の  
価値創造

**全体最適**  
データ駆動の  
横断的最適化

\*1 出典：IPA,「[データ経営の総合力を高めるデータマチュリティ読本](#)」

\*2 出典：IPA,「[DX推進指標](#)」

# データマチュリティが低いことによるリスク

データマチュリティの不足は、すぐに業績には表れません。影響は遅れて、間接的に表れます。したがって、**気づいた時には手遅れ**になっているということが生じます。しかも、日々の積み重ねが不可欠であり、**急場しのぎは通用しません**。

## ■ リスクの例

データマチュリティが低いことに起因するリスクの想定事例につきましては、次項をご参照ください。

### データに起因する問題の発生

- 不正確なデータに基づく誤った意思決定
- データ品質の低さによるシステム障害・手戻り
- コンプライアンス違反・セキュリティインシデント

### 機会損失の発生

- 顧客ニーズの変化に気づけず、売上が減少する
- 効果の出していない施策にコストを投じ続ける
- 新規事業・サービスの企画が「勘と経験」頼みになる

### 対応コスト・技術的負債の増大

- データ基盤の後追い整備にかかるコストの肥大化
- 属人化・サイロ化が進み、改善の難易度が上昇
- 他社・業界標準との乖離が広がり、連携が困難に

# AI過信が招く巨額損失 ～データ特性の不理解～

## 背景

需要予測AIの精度を過信し、大量の在庫確保を自動化。  
AIは過去の需要増トレンドのみを学習していた。

## 生じるリスク

- AIが不連続な変化（原材料高騰・消費行動の変化）を捉えられず、過剰仕入れ
- データの前提変化を検知できず、損失が拡大し続ける
- AIの判断根拠を誰も説明できず、損失が膨らむまで止められない

## 対策

- 利用するデータの特徴（前提条件・適用範囲・鮮度）を評価・文書化するプロセスを持つ
- データに基づく意思決定の妥当性を組織として検証する仕組みを設ける
- 「このデータで何が言えて、何が言えないか」を判断できる人材を育成する

1

### 過去データのみで学習

需要予測AIが過去の需要増トレンドだけを学習データとして使用

2

### 不連続な変化を見逃す

原材料高騰や消費行動の変化など、過去データにないイベントを捉えられない

3

### 過剰仕入れの発生

AIが需要を過大に予測し続け、大量の在庫確保を自動で実行

4

### 損失拡大・停止不能

判断根拠を誰も説明できず、損失が膨らむまでAIを止められない

# ダッシュボードの形骸化 ～ツール導入の目的化～

## 背景

数千万円を投じてダッシュボードを構築。  
しかし組織にデータで判断する文化・能力がなかった。

## 生じるリスク

- データを読み解ける人材がおらず、「見て終わり」が常態化する
- 施策の効果をデータで検証する習慣がなく、勘と経験則に頼った判断に戻る
- 「データは役に立たない」という誤った認識が組織に定着する

## 対策

- ツール導入と合わせて、データリテラシーの底上げと「誰がどう使うか」を設計する
- 小さな意思決定から「データで判断→結果を振り返る」サイクルを根付かせる
- 現場が扱える粒度のデータから始め、活用能力に合わせて段階的に拡張する

1

### ツール導入が目的化

「作ること」がゴールになり、利用設計が不在

2

### 使える人材がない

データを読み解ける人材がおらず判断に結びつかない

3

### 「見て終わり」が常態化

効果検証の習慣がなく、勘と経験則に頼った判断に戻る

4

### 「データは無意味」と誤った認識が定着

「役に立たない」という認識が組織に定着

# データのサイロ化 ～過度の個別最適～

## 背景

各部署が個別最適でデータ基盤を個別導入し、システムとデータが乱立

## 生じるリスク

- 同じ顧客が部署ごとに「別人」として管理される
- 専門人材が表計算ソフトによる手作業の集計に時間を奪われる
- 全社横断の分析・判断ができない

## 対策

- 「他部署との連携要件」をレビューするプロセスを設ける
- 部署間で共通する主要データ（顧客・商品等）の定義を棚卸しする
- 部署横断の「データスチュワード」を置き、定義や連携の橋渡しをさせる

1

**各部署が個別にデータ基盤を導入**

部署ごとの個別最適でシステムとデータが乱立

2

**同じ顧客が「別人」に**

部署間でデータ定義が異なり、統合できない

3

**手作業・属人化が蔓延**

専門人材が表計算ソフトによる手作業の集計に時間を奪われる

4

**全社横断の判断が不能**

分析・意思決定の質が低下し、機会損失が拡大

# データマチュリティ向上の難しさ

## ■ 代表的な要因

### データ資産価値の認識不足

- データは目に見えない、抽象的な資産であるため、価値を定義するのが難しい

参考：IPA、「[経営者のためのデータ経営読本](#)」よりIPA解釈

### 組織的なデータ利活用能力の必要性の認識不足

- ツールやAIの進化が早く、その整備に注力されてしまう。また、ツールがあればデータ利活用できると考えてしまう

参考：デジタル庁、「[データガバナンス・ガイドライン](#)」よりIPA解釈

### 組織的なデータ利活用能力の向上・評価方法の不明確さ

- 価値評価が多岐にわたり、間接的なため、評価が難しい。なにから実施すればいいかわからない

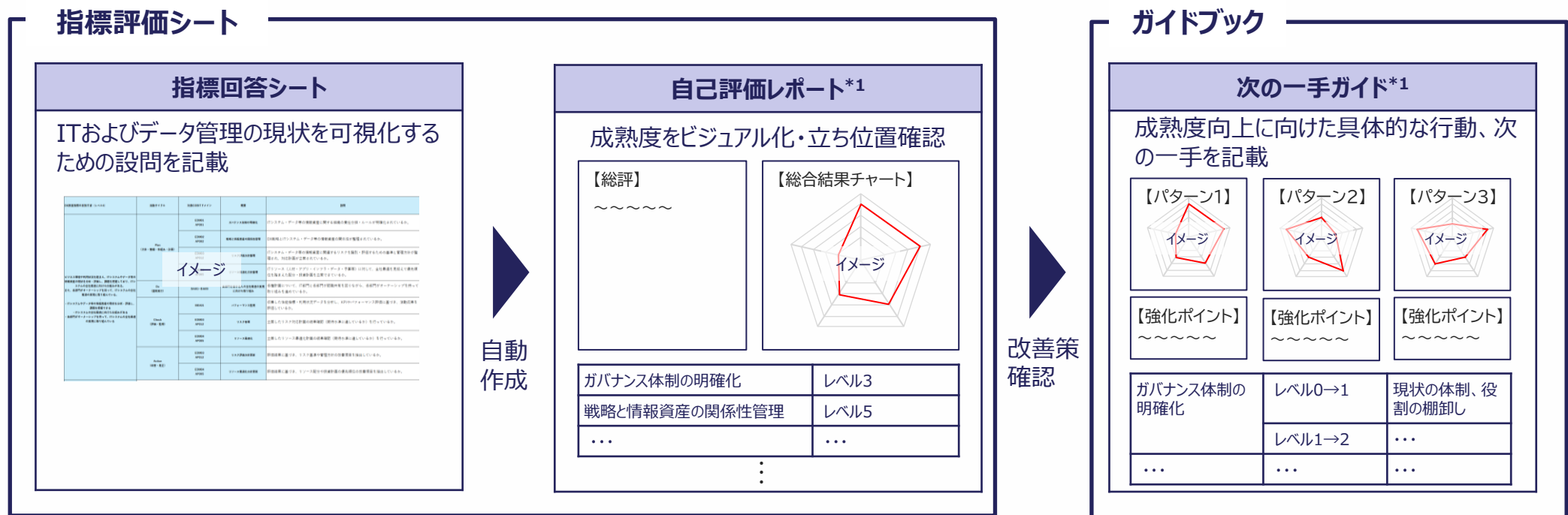
参考：Data Orchard、「[Three reasons why not-for-profits should take a Data Maturity Assessment](#)」よりIPA解釈

データマチュリティ推進指標を用いると、データ利活用能力を計測する難しさが解消されると同時に、可視化と改善のサイクルによって継続性のある「組織のデータ利活用能力」を実現できます。

# データマチュリティ推進指標とは

- データマチュリティ推進指標は、経営者や社内の関係者がデータマチュリティの推進に向けた現状や課題に対する認識を共有し、アクションにつなげるための気づきの機会を提供する知見をまとめた資料です。
- 「指標回答シート」、「自己評価レポート」、「ガイドブック」から構成されます。

「(1)自己診断～(2)結果確認～(3)次の一手確認」を繰り返すことで、組織的なデータ活用能力を継続的に向上



\*1 今後作成予定。

# データマチュリティ推進指標の目的と策定方針

データマチュリティ推進指標で実現したいこと（目的） は以下の通りです。

1. 「企業の組織的データ利活用能力向上の進行度の可視化」を通じた、
2. 「ベストプラクティスに加えた、自組織の強み・弱みに基づく体系的な能力向上」を可能にする

## 策定方針1.

### 重要性の理解を促進しつつ、進行度を可視化

- 指標が机上の空論に終わらず、さまざまな企業が納得した上で、**実際の行動につなげられる**評価指標を目指す

データマチュリティを高める重要性・必要性

- データマチュリティを高めないリスクを伝える
- データマチュリティを高める利点を伝える

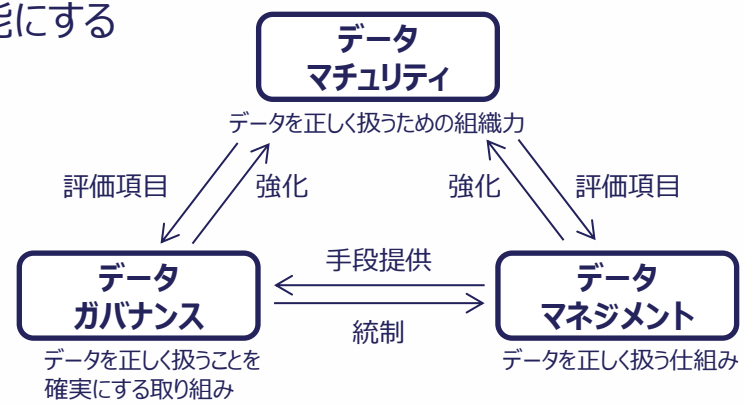
指標の利用促進

- 幅広い企業へ指標を届ける
- 組織全体で一貫して指標を浸透させる
- 指標の使い勝手を高める

## 策定方針2.

### ベストプラクティスの活用と日本の重点課題への対応

- IPAが国内外動向を調査・整理した**データガバナンス**や**データマネジメント**のベストプラクティス\*1を基礎とし、**日本のデータ利活用の課題に対応する指標を重視**して測定可能にする



データ戦略に関連する3つの取り組み\*2

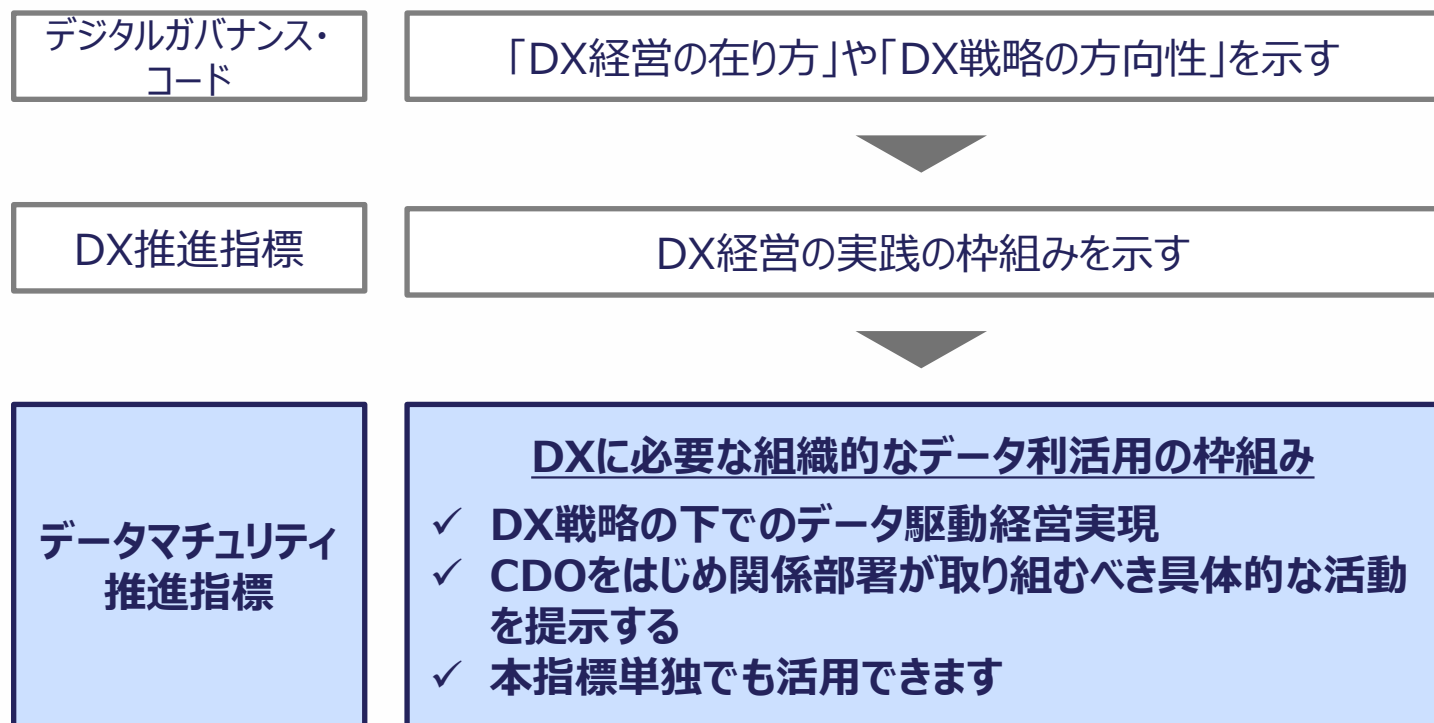
参考：\*1 IPA,「データガバナンス読本」,「データマネジメント読本」,「データマネジメントに関する調査考察」, \*2: IPA,「データマチュリティ読本」

# データマチュリティ推進指標の位置づけ

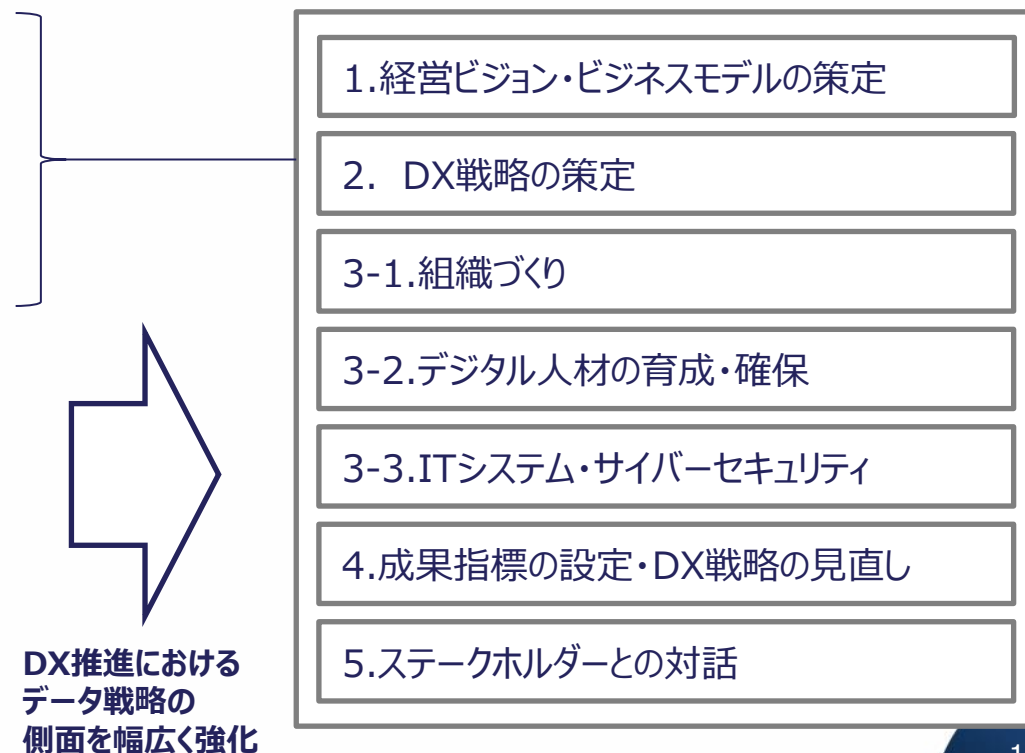
本指標は、**DX戦略とデータ駆動戦略をつなぐ指針**となることを目指しています。

- 「デジタルガバナンス・コード」でデジタル技術と並ぶ要素として挙げられている**データに関する具体的指標**を提供
- 特に、**組織のデータ利活用能力**を可視化することで組織全体がデータを利活用できるようになることを目指す
- 経営者向けのDX推進指標とあわせて、**CDO（Chief Data Officer）** が**データ駆動経営**を実現しやすくなる**共通言語**として機能

## データマチュリティ推進指標の位置づけ



## DX推進指標



# データマチュリティ推進指標の活用方法

- 本指標は「CDO(Chief Data Officer)、データ戦略に携わる方、データ利活用を推進・実行する立場の方」が主導して判定し、「経営層」と会話するコミュニケーションツール（共通言語）として活用することで、経営と現場が一体となりデータ利活用を推進できます。
- 自己診断や改善活動はステークホルダーとの対話を通じて進め、定期的な評価によりDX推進の進捗と改善の方向性を明確化し、継続的に成熟度向上を図れます。

プロセス	実施内容	使用ツール	CEO	CDO(*)	情シス部門	業務部門
1. 自己診断	<ul style="list-style-type: none"> <li>設問に回答し、データマチュリティ状況を診断</li> </ul>	指標回答シート	承認	回答指示承認	情報提供・回答作成	
2. 結果確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己評価レポートのレーダーチャートやベンチマークから自社の改善点・立ち位置を確認</li> </ul>	自己評価レポート	承認	改善指示承認	結果確認・改善点検討・提案	
3. 次の一手の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>次のレベルに行くためのアクションをガイドブックにて確認</li> </ul>	ガイドブック	承認	アクション指示承認	アクションの確認	
4. 改善遂行	<ul style="list-style-type: none"> <li>経営層と協議しながら施策の方針を策定</li> <li>情シス部門や業務部門など現場と連携を取り施策の計画・実行を推進</li> </ul>	—	承認	施策指示承認	施策検討実施	

(\*) CDOを配置していない企業の場合、それに相当する役職や部署を想定

## 2. データマチュリティ推進指標の「設計」コンセプト

# データマチュリティ指標回答シートの構成要素

- 設問回答シートは、**成熟度**、**カテゴリ**、**設問**の3要素を組み合わせることで構造的に表現されます。

**成熟度**  
取組状況の到達度

**カテゴリ**  
データマチュリティを構成する評価領域

**設問**  
具体的な質問項目

指標評価シート

指標回答シート ※イメージです

カ  
テ  
ゴ  
リ

設問

成熟度を表す状態・活動

設問

成熟度を表す状態・活動

設問

成熟度を表す状態・活動

設問

成熟度を表す状態・活動

体系的に状況を把握  
後に改善にも役立つ

状況や状態を自己評価

定性的な状態をレベル  
定義に従って選ぶことで  
定量化

# (補足) 設計における工夫ポイント

- DXの進展を組織的なデータ利活用能力の観点から後押しするために、指標の策定においては「**実効性**」と「**使いやすさ**」を重視して以下のような工夫を施します。

## 工夫1：実効性

- 指標を「**実際の企業行動変化に結びつく**」ようにすること

#	要素	主な観点	工夫の例
1	行動誘発性	<ul style="list-style-type: none"> <li>次の行動（改善・投資・体制整備など）につながるか</li> <li>「次に何をすべきか」が明確になる設計</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アクションの想像がつかような設問になるよう心がける</li> </ul>
2	改善連動性	<ul style="list-style-type: none"> <li>継続的な自己改善が可能か</li> <li>経年比較やベンチマークによる改善サイクルの実現</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>持続性が大切な設問を含める</li> </ul>
3	内部活用度	<ul style="list-style-type: none"> <li>経営層・現場層の共通言語として議論に活用されるか</li> <li>利用者層の広さ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>技術的な専門用語をできるだけ避ける</li> </ul>

## 工夫2：使いやすさ

- 指標を「**多様な企業にとって使いやすい**」ものにする

#	要素	主な観点	工夫の例
1	多様性	<ul style="list-style-type: none"> <li>企業規模・業界を絞らず広く適用できるか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>業界固有の課題、特定事例の課題よりも、汎用性の高い課題を重視する</li> </ul>
2	理解容易性	<ul style="list-style-type: none"> <li>構成や活用による効果がわかりやすいか</li> <li>設問背景のわかりやすさ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>できるだけ簡潔に記載するが、背景や理由の補足が必要なものは記載する</li> </ul>
3	操作容易性	<ul style="list-style-type: none"> <li>入力・提出・分析のプロセス負担が少ないか（エクセル・Webフォーム・自動化等）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>設問ボリュームに留意する</li> <li>集計をしやすい構成にする</li> </ul>

## 2. データマチュリティ推進指標の「設計」コンセプト

**成熟度**

カテゴリ

設問

# データマチュリティ推進指標 成熟度の設計

- DX-IT推進指標の成熟度との整合性を取り、レベル0~5の6段階とします。
- これらの共通の成熟度レベルを基準とし、**設問単位で成熟度レベルの表現を調整しています。**
- 今後は、日本におけるデータ利活用の現状を踏まえ、データマチュリティ推進指標のレベルについて、実情に応じた調整を検討する余地があります。

成熟度レベル	名称	共通のレベル定義
5	最適化レベル	定量的な評価結果を踏まえ、環境変化や戦略の変化に応じて、仕組み自体を継続的に見直し、進化させている
4	定量管理レベル	KPIや指標に基づき、実施状況・効果を定量的に把握し、最適化の判断に活用している
3	標準化・定着レベル	全社または組織基準として定義され、安定的に運用されている
2	管理レベル	手順・ルールとして明確化され、管理・統制のもとで実施されている
1	実行レベル	一部部署・担当者により活動は行われているが、属人的で再現性が低い
0	未実施	活動が存在しない、または断片的で継続性がない

**【調整案】**レベル定義の調整余地を検討  
 (例:データ利活用の初期段階にある組織にとっては、レベル0から1が難関ポイントであり、レベル間を細かく刻む等)

**【調整案】**実施難易度の高いことが想定されるレベル0から1に向けてどんなアクションがあるか検討(ネクストアクションをガイドブックに記載等)

## 2. データマチュリティ推進指標の「設計」コンセプト

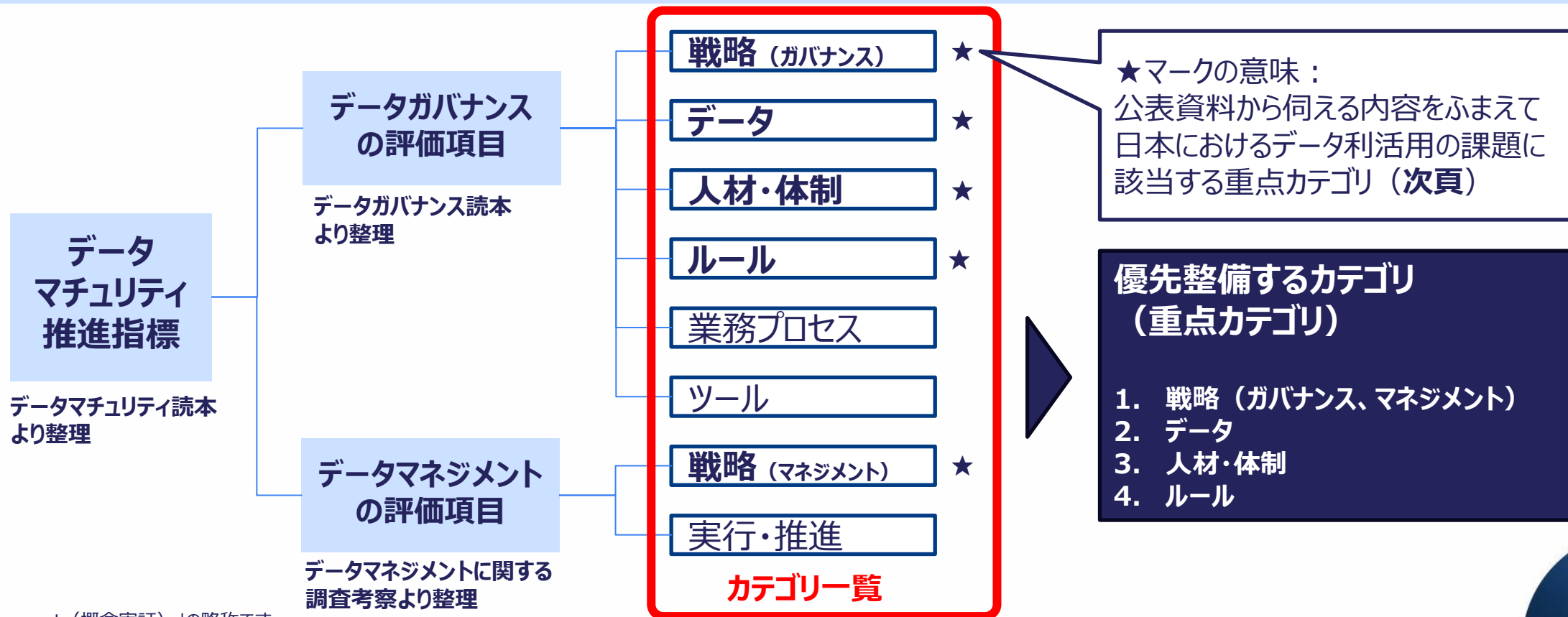
成熟度

**カテゴリ**

設問

# データマチュリティ推進指標 カテゴリの設計

- IPAが整理した「データ戦略に関連する3つの取り組み」（データマチュリティ・データガバナンス・データマネジメント）のナレッジを参考にカテゴリを設定します。
- 日本のデータ利活用の課題に紐づくカテゴリであり、かつPoC\*1協力企業の課題認識として多かった上位カテゴリ、「戦略」、「データ」、「人材・体制」、「ルール」を対象に設問を策定します。



\*1 PoCは「Proof of Concept (概念実証)」の略称です。

# カテゴリの主旨

- カテゴリとは、各カテゴリの背景に示された課題やリスク、期待される成果を読み解き、共通する要点を整理して抽出したものです。
- 組織にとって果たす役割や、何を検証するために設けられているのかを明確に説明しています。

#	カテゴリ	カテゴリの主旨
1	戦略	「戦略」カテゴリの主旨は「戦略の実効性と組織への浸透プロセスの妥当性」の確認です。客観的根拠に基づく公式戦略の策定、トップダウンによる共通目的の明示と納得感の醸成、さらに多角的な効果評価による投資の正当化を軸としています。これらを通じ、戦略を形骸化させず、組織内外の信頼を得て持続的に推進できるかを検証します。
2	データ	「データ」カテゴリの主旨は「資産としてのデータの最適化と、持続的な活用基盤の妥当性」の確認です。データの可視化による探索コストの削減、経営投資を通じた品質維持とセキュリティ強化、さらには組織横断的なデータの統合による意思決定の高度化を軸としています。これらにより、リスクを抑えつつデータの価値を最大限に引き出す仕組みを検証します。
3	人材・体制 (組織・文化含む)	「人材・体制」カテゴリの主旨は「持続的な価値創出を可能にする人的資産と組織的適応力の妥当性」の確認です。中長期的な人材投資やスキルの可視化による専門性の向上、経営層から現場までが当事者意識を持つ体制整備、さらには倫理的・法的リスクを回避する高度なリテラシーの醸成を軸とし、組織全体の成熟度向上と事業成長の実現を目指します。
4	ルール	「ルール」カテゴリの主旨は「安全かつ高品質な利活用を担保する統制基盤の妥当性」の確認です。統一ポリシーによるリスク管理、責任範囲の明確化によるコンプライアンス強化、そして経営層の関与と教育を通じたルールの形骸化防止を軸としています。これらを通じ、組織を守りながら活用の質を最大化する規範が機能するかを検証します。

# データマチュリティ推進指標 カテゴリー一覧

- 後述の指標（設問）の観点をイメージしていただくため、カテゴリごとの観点例を記載します。

	カテゴリ（案） ★重点カテゴリ	指標で評価すべき主な観点（例）
1	戦略★	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 経営戦略に沿ったデータ戦略の策定</li> <li>✓ データ関連の投資計画の策定</li> </ul>
2	データ★	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ データの収集・蓄積</li> <li>✓ データ品質が改善される仕組み</li> </ul>
3	人材・体制★	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 必要な人材の定義</li> <li>✓ 採用・育成計画の整備</li> </ul>
4	ルール★	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ データ品質を担保するルール</li> <li>✓ データを安全に利用するための責任範囲</li> </ul>
5	ツール	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 分析基盤の整備</li> <li>✓ データ連携環境の整備</li> </ul>
6	業務プロセス	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ データライフサイクルに沿った活用業務の定義</li> </ul>
7	実行・推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ データ活用の推進</li> <li>✓ 経営層の巻き込み</li> </ul>

# (補足) 日本のデータ利活用の状況に基づいた重点カテゴリ

- 公表資料をもとに、日本企業でデータ利活用が進まない要因を整理し、2つ以上の出典に課題の記載のあるカテゴリを優先整備するカテゴリ（重点カテゴリ）としました。

ファクトの出典	日本においてデータ利活用が進まない要因	戦略★	データ★	人材体制★	ルール★	ツール	業務プロセス	実行推進
包括的データ戦略(デジタル庁)	• 戦略の不在	●						
	• ガバナンスの不整備 • データルールの厳格さ(過保護) • データルールの複雑化				●			
	• データに関するリテラシーの低さ			●				
プラットフォームにおけるデータ取扱いルールの実装ガイダンス(デジタル庁)	• データ共有への強い懸念			●				
経営者のためのデータ経営読本(IPA)	• (戦略策定前の)経営層によるデータ活用重要性の理解不足	●						
	• 他社またいだ連携の壁			●				
	• 存在するデータ/必要なデータの全体像が見えない		●					
データ利活用制度の在り方に関する基本方針(内閣官房)	• 部門をまたいだ連携の壁 • 技術的負債によるデータ利用環境整備不十分			●		●		
DX白書(IPA)	• (データを経営資源としてDX推進するにあたり)人材像が定義されていない			●				
データガバナンス・ガイドライン(デジタル庁)	• データ処理がブラックボックスのAI技術への不信感			●				
	• 自社内のシステム単位のみを対象にした安全・安心の担保				●			
データ品質管理ガイドブック(デジタル庁)	• データ品質(最新でない・誤りがある等)に問題		●					

## 2. データマチュリティ推進指標の「設計」コンセプト

成熟度

カテゴリ

**設問**

# データマチュリティ推進指標 設問の設計

- データマチュリティ推進に用いる指標は日本においては広く定着しているものが少ないため、国内外の既存指標を参考にしつつ、「日本固有の課題」、「各カテゴリ固有の課題」を補完して定義します。

設問の組み立て方

## ステップ1

基礎となる項目を  
調査し洗い出す

基礎となる要素

①既存指標

国際的にも公開され、実際に使用されているデータマチュリティモデルを参考に設問抽出  
(※今回用いた指標は次頁)

## ステップ2

補完的な情報を  
分析・検討して洗い出す

補完要素

②日本固有

前述の「日本のデータ利活用の状況に基づいた重点カテゴリ」のデータ利活用が進まない要因を活用して観点を補完

③カテゴリ固有

前述の「カテゴリの設計」に用いた情報（IPAのデータガバナンス・データマネジメントの資料）や、本指標の主な対象であるCDOの役割（IPAのCDO読本）を活用して観点を補完

## ステップ3

設問間の重複、日本語表現上の違和感などを解消しながら統合する

日本向け設問

日本の企業や組織が利用するにあたり、読みやすく、理解しやすいように表現を調整

コンセプト具体化の方向性確認は、別添の**指標回答シート（サンプル）**をご確認ください。  
また、設問の策定過程につきましては、“付録：設問の策定過程”をご参照ください。

## (補足) 「①既存指標」として参考にした指標

- 前述の「設計における工夫ポイント」をおさえている指標として下記3つの指標を、基礎となる項目の洗い出しのための「①既存指標」として選定しました。

指標名	概要	選定根拠
Data Maturity Assessment for Government (DMA)	英国政府が各公共部門がデータ利活用能力や有効性を評価するためのデータ成熟度評価フレームワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>公共性は高いものの、データ戦略はじめデータマチュリティを測定する要素(特にデータガバナンス)が揃っている</li> </ul>
Data Maturity Assessment Tool (DMAT)	豪州政府があらゆる規模の機関がデータ利活用能力の強みと改善領域を特定し、データ管理と投資判断を導くことを支援するデータ成熟度評価フレームワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>公共性は高いものの、特にデータマネジメントの観点で体系化されていること、ツール作成が主目的にならないように策定された背景が日本の課題にも通じる</li> </ul>
MA-ATRIX	日本の複数の民間企業が組織全体を俯瞰し、体系的なアプローチを重視した生成AI活用成熟度モデル	<ul style="list-style-type: none"> <li>生成AI活用に主眼を置いているが、適切なデータマネジメントを前提となっており生成AIにおけるCDOポジションによる利用を想定</li> </ul>

## (補足) ②日本固有のデータ利活用が進まない要因の分析

- 日本企業の特徴を考慮した“使える”データマチュリティ推進指標策定のために、データ利活用が進まない要因を分析し、設問検討などの参考にします。

#	カテゴリ	民間でデータ利活用が進まない要因 (仮説を含む)	民間企業向けに言い換え、追加	
			参考	出典
1	戦略	<ul style="list-style-type: none"> <li>企業としてのデータ戦略の不在</li> <li>定量効果の過度な重視</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>戦略の不在</li> </ul>	<a href="#">包括的データ戦略</a>
2	ルール	<ul style="list-style-type: none"> <li>企業内のデータルールの厳格さ</li> <li>企業のデータガバナンス未整備</li> <li>データにかかるルールの複雑化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>データ過保護</li> <li>国際的なガバナンスの不整備</li> <li>ルールの複雑化</li> </ul>	<a href="#">包括的データ戦略</a>
3	人材・体制 (組織・文化含む)	<ul style="list-style-type: none"> <li>データに関するリテラシーの低さ</li> <li>データ利活用に必要な人材の定義不足</li> <li>企業が他組織へデータ共有するメリットを感じられない・漠然とした不安</li> <li>データ処理がブラックボックスの技術への不信感</li> <li>縦割り文化による連携の壁</li> <li>データに関わることを他人任せにする風潮</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>データに関するリテラシーの低さ</li> <li>データ共有への強い懸念</li> <li>他社・部門をまたいだ連携の壁</li> <li>データ処理がブラックボックスのAI技術への不信感</li> </ul>	<a href="#">包括的データ戦略</a> <a href="#">プラットフォームにおけるデータ取扱いルールの実装ガイダンス ver1.0</a> <a href="#">経営者のためのデータ経営読本</a> <a href="#">データ利活用制度の在り方に関する基本方針</a>
4	データ	<ul style="list-style-type: none"> <li>存在するデータ/必要なデータの全体像が見えない</li> <li>データ品質を判断できない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>存在するデータ/必要なデータの全体像が見えない</li> <li>データ品質の問題</li> </ul>	<a href="#">データ利活用制度の在り方に関する基本方針</a> <a href="#">経営者のためのデータ経営読本</a> <a href="#">包括的データ戦略</a> <a href="#">データガバナンス・ガイドライン</a>
5	ツール	<ul style="list-style-type: none"> <li>ツールの導入が目的化</li> </ul>		

# 付録 1 : 用語集

# 用語集

本資料では次のように定義します。

用語	説明
データマチュリティ	組織的なデータ利活用能力。
データマチュリティ推進指標	経営者や社内の関係者がデータマチュリティの推進に向けた現状や課題に対する認識を共有し、アクションにつなげるための気づきの機会を提供するもの。質問形式の評価シート、それをを用いた改善活動のためのガイドなどを含む。
カテゴリ	データマチュリティ推進指標を構成する設問シート内の設問グループ。設問を体系化したもの。
設問	各カテゴリに属する、組織の取組状況を評価するための具体的な質問項目。
成熟度	各設問に対する取組状況の到達度を示す概念。複数段階のレベル定義として定義される。
成熟度レベル	成熟度を評価するために設定された段階区分。データマチュリティ推進指標では、0～5段階の6段階で成熟度を示す。なお、CMMI等の成熟度モデルでは、5段階が用いられている。

## 付録 2 : 設問の策定過程

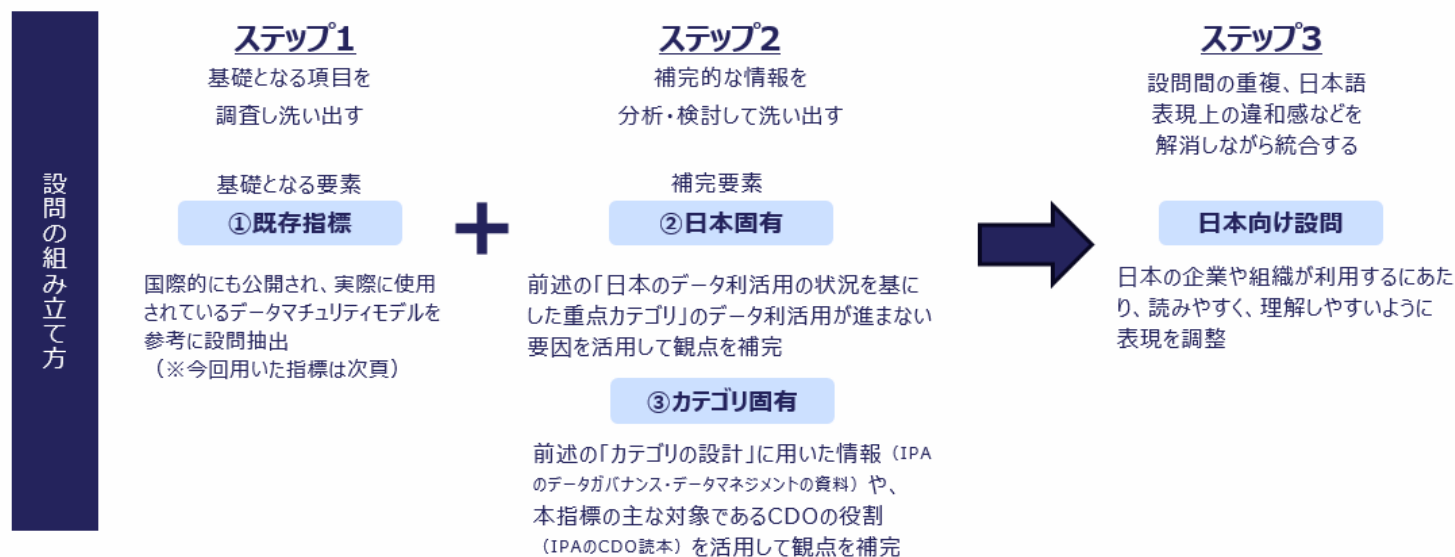
# 指標設問の策定過程（サンプル）

- 「データ」カテゴリを対象とした設問の策定過程をサンプルとして紹介します。

## ◆ 設問の策定ステップ

- 設問策定を下図ステップに沿い①既存指標②日本固有③カテゴリ固有の視点で洗い出し、重複を排除し、可読性を高める表現を調整した結果を設問案として記載します。

【参考】前述の「データマチュリティ推進指標 設問の設計」より



# ステップ1 ① 既存指標からの設問洗い出し

英国や豪州、MA-ATRIXの指標群を参考に、「データ」カテゴリに該当する観点や設問を調査したうえで、日本語に翻訳しつつ、要点が分かるような表現に直し、必要に応じて備考に補足説明をしています。

← 素材 → ← 独自に策定 →

参考にして作成

#	分類	概要	左記から想定される設問案	備考
1	他者との連携	必要な人にデータを提供できるようにする。	データが必要なユーザに対し、アクセス権が設定された上で、直接データにアクセスできるか	
2	他者との連携	データに変更を加える際には、ユーザーのニーズを考慮する。	データの変更時、仕組みの変更が最小限になるように、連携先と相談の上で変更内容が発信されているか	
3	適切なデータスキルと知識	データ共有に必要な段取りを理解する。	組織横断で積極的にデータが共有できるよう、手順・ルールが文書化されているか	
4	保有データの把握	データの見つけやすさを確保する。	重要なデータセットが一覧で文書化され、ユーザーがサポートなしに検索できるか	
5	保有データの把握	データの廃棄を適切に管理する。	データライフサイクル開始時に、データ廃棄の手順が文書化されているか	長期保存の要件も加味する
X	...	(省略)	(省略)	(省略)

## ステップ2 ②日本固有の設問洗い出し

日本でデータ利活用が進まない要因（仮説を含む）のうち「データ」カテゴリに該当するものから、企業が回答しやすい設問を策定します。

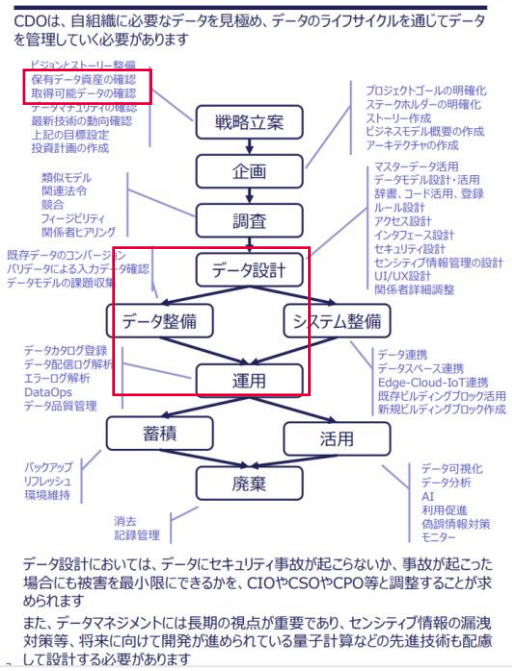
← 素材 → ← 独自に策定 →

参考にして作成

#		民間でデータ利活用が進まない要因	左記から想定される設問案	備考
1	データの全体像が見えない	組織の各所に分散しているデータの全体像が見えず利活用できていない	あらゆる部署で所有するデータの全体像が把握できるか	
2	データの品質に問題がある	最新でない・誤りがある等、データの品質に問題があり利活用されない	データの品質を高める取り組みを実施しているか	データの品質を高める取り組み:最新情報にする・データの誤りを定義し検出する・データを分析に使いやすいようにデータ形式を整えるなどの加工をする(クレンジング)

# ステップ2 ③カテゴリ固有の設問洗い出し（1/2）

- IPA CDO読本に記載の戦略立案に関するCDOタスクを基に、CDOが自身の業務と関連付けて評価ができるよう、戦略立案に関連する業務を起点に設問を策定します。



#	分類	CDOタスク	設問案	備考
1	戦略立案	保有データ資産の確認	保有データ資産が一覧表として明らかになっているか	
2		取得可能データの確認	組織全体でどのシステムで何のデータが取得可能か一覧表として明らかになっているか	
3		データ設計・整備	データ利活用に必要なデータ設計(*)を実施しているか	(※)データ設計: マスターデータ設計・データモデル設計・辞書/コード登録・アクセス設計・インタフェース設計・セキュリティ設計・センシティブ情報管理の設計・UI/UX設計
4		データ整備	データ利活用に必要なデータ整備(*)を実施しているか	(※)データ整備: 既存データを設計に従って変換・入力データの確認・データモデルの課題収集等
5		運用	データ利活用に必要なデータ運用(*)を実施しているか	(※)データカタログの更新・エラーログ解析・データ品質のモニタリング及び品質向上の取り組み

# ステップ2 ③カテゴリ固有の設問洗い出し（2/2）

- IPA データガバナンス読本の「データ管理」に関する記載を基に設問を策定します。



## データガバナンスの取り組みステップ

データガバナンスは守りの仕組みではなく、データを活かすための仕組みです。日本企業はデータを囲い込むケースが多いですが、データガバナンスを組織の活動に組み込み、適切にデータを連携させることにより、社会全体で様々な価値を生み出すことができます。

- 1. 目標設定**  
データガバナンスの目的と期待される成果を明確にします。
- 2. 現状評価**  
既存のデータ管理プロセスやインフラの現状を評価し、ギャップを特定します。
- 3. ガバナンス構造の設計**  
データガバナンスの方針、役割、責任を定義し、関与するステークホルダーを特定します。
- 4. ポリシーと手順の策定**  
データ管理の基準、手続き、セキュリティ方針を策定します。
- 5. ツールと技術の選定**  
データガバナンスを支援するための適切なツールや技術を導入します。
- 6. トレーニングと教育**  
データガバナンスの重要性と実施方法について、スタッフに教育を行います。
- 7. 実施とモニタリング**  
  - 策定したポリシーと手順を実行し、定期的にモニター・評価します。
  - データ品質が継続的に改善しているか、定期的にモニター・評価します。
  - ランサムウェア対策など、適切なセキュリティ対策が行われているか定期的にモニター・評価します。
- 8. 継続的改善**  
モニタリングの結果に基づいて、プロセスやポリシーを継続的に改善します。



#	データガバナンスの取り組みステップ	設問案	備考
1	データ品質が継続的に改善されているか、定期的にモニター・評価します	データ品質管理に関する活動がモニタリング・評価されているか	
2	ランサムウェア対策など適切なセキュリティ対策が行われているか定期的にモニター・評価します	データのセキュリティ対策(※)が実施されているか	(※)データのセキュリティ対策:ランサムウェア対策等

# ステップ3 「データ」カテゴリの設問案まとめ

- ステップ1、2それぞれで策定した設問案を基に、重複する設問について統合し、表現を修正して設問シートに記載する設問項目を策定します。（検討結果の詳細は「指標回答シート（サンプル）」に記載）

#	主体	設問案	補足	背景	①既存指標	②日本固有	③カテゴリ固有
1	CDO・現場	各部署で所有する重要データの一覧（※）が、検索できるようになっているか	（※）一覧：システム単位で取得できるデータ・データの所有権と廃棄責任が明確に定義されたもの	何のデータを用いることができるか把握できることで「どこに、どんなデータがあるのか」を探す時間が減り、活用のスピードが向上する	英	●	●
2	CDO・現場	データ品質が低いとビジネスにどのように悪影響があるか、関係者に周知しているか		データ品質により、自身の組織に悪影響が起これることを自覚することで「品質改善されないままデータが使われ続けるリスク」が軽減される	英		
3	CDO	組織横断でデータを共有するための手順やルールが文書化されているか		組織横断のデータの共有方法が明示されることで、共有の手順や責任範囲が曖昧なことによる“結局誰も共有しない”状態になるリスクが軽減される	英		
..	...	...	...		...	...	...

本件に関するお問い合わせおよび アンケートのご提出先につきましては、  
下記窓口までお願いいたします。

## 【データマチュリティ推進指標窓口】

- メールアドレス : [disc-legacy-mod@ipa.go.jp](mailto:disc-legacy-mod@ipa.go.jp)



データマチュリティ推進指標 説明書 <https://www.ipa.go.jp/disc/committee/dx-it-data-assessment.html>

2026年5月25日

独立行政法人情報処理推進機構 ©Information-technology Promotion Agency, Japan (IPA) <https://www.ipa.go.jp>

<この文書のご利用にあたって> 本ガイドの内容を適用した結果生じたこと、また、適用できなかった結果については、IPAは一切の責任を負いかねますのでご了承ください。